

役立たずの人質姫なのに

独占欲全開の騎士王様の溺愛が止まりません

プロローグ

「貴女^{あなた}は、俺だけを見ていればいい」

「待っ……！」

両手を頭上で縛られ、両脚は目の前にいる男——ハロルドによって大きく開かれている。

夜着は剥^はぎ取られ、晒された裸体を隠す術もなく、身動きも取れない。

今のフローラには、身体を震わせながら迫り来る快感を享受することしか許されていなかった。

ハロルドがフローラの太ももに強く吸いつく。支配の証を残しながら、ハロルドはその中心に頭を埋めた。

「貴女の身体は、どこも甘そうだ」

ざらついた舌が、ためらいもなく秘所を舐^なめる。

「ひゃ、っん……やめ……っ、あ！」

制止の声は言葉にならず、跳ねる身体を押さえつけられて、快楽の波を逃すこともできない。

もがけばもがくほど、フローラを拘束している布がギュッと締まる。両手首を縛っているのは、柔らかい素材のリボンだ。柔らかい肌を傷つけることはなかったけれど、外れる様子もない。

「お仕置きだからな。解いてやらないぞ」

嬌声^{きやうせい}を上げながら、ただただ身体をくねらせるフローラを上目遣いで確かめつつ、ハロルドは舌を蜜壺の中に差し込んだ。

「いや、んあ……っ、あ……んう」

繰り返して愛を教え込まれた身体は、わずかな刺激で簡単に熱を持つ。

じわりと溢れた愛蜜を舌で掬^{すく}い取って、ハロルドは満足そうに顔を上げた。
フローラを見下ろす瞳は、獲物^{えもの}を狩る猛獣そのもの。

「俺が嫉妬深いことは、もう理解してくれたら思っていたが」

「心配するようなことは、なにも……」

「事実関係ない」

ハロルドは不安にさせたことが罪だとしても言うように、指先でフローラの唇をなぞる。

ゾクリと背中が震え、小さく開いた口にハロルドの唇が重なった。

つい先ほどまで秘所を責めていた大きな舌が、くちゅりと音を立ててフローラの口内を蹂躪^{じゅうりゃん}する。
激しい動きに必死で応えている間に、熱を帯びた蜜壺へ、ハロルドの指が伸びていく。

（今度はなにが、ハロルド様を不安にさせてしまったのかしら）

今日は誰とも、雑談どころか必要最小限の会話しか交わしていない。

唯一考えられるとしたら、書類を確認していた時の、宰相との距離感くらいだろうか。

（細かな部分を確かめたくて、手元を覗き込んだ記憶はあるけれど……）

だがそれも、執務室での話だ。ハロルドも、状況の一部始終は見えていたはずである。

「ハ、ロル……っ、あ」

「今夜は寝られると思うな」

説明を試みようとするけれど、甘い命令とともに再び唇を塞がれた。

きつとハロルドも、誤解だとわかっている。わかっている、湧き上がる嫉妬と独占欲が抑えきれない、といったところだろうか。

強引なように見えるのは、臆病さの裏返しだ。皆の前では強くて頼もしいハロルドが、フローラだけに見せる弱さを、愛おしく思った。

（今日はいつもより、意地悪だけれど……）

最終的には、彼がフローラの気持ちと身体を尊重してくれることを、もう知っている。

「は……っ、んう……あ」

支配するようなセリフを吐くくせに、強引に事を進めるような素振りを見せるくせに。

どうしたって、フローラを労らずにはられない、優しい人だから。

フローラが今なすべきは、愛しい人の不安を取り除くこと。

「なにを考えているんだ？」

「貴方^{あなた}のことを」

集中していないと感じたのか、ハロルドが不満そうに口を尖らせる。

その突き出された唇に、ちゅっとな音を立てて触れるだけのキスを返した。すぐに口内に侵入して

きた舌に絡め取られて、口づけが深まる。

あつという間に主導権を奪われてしまったけれど、ハロルドは嬉しそうだ。

どうやらフローラの言動は、正解だったらしい。まんまと機嫌を取られたと気づいたハロルドが、一瞬しまったという顔をして、楽しそうに笑った。つられて、フローラの頬もゆるむ。

「いいか？」

準備の整った下半身に熱を押しつけながらも、律儀に確認してくる彼の言葉に、フローラはパチパチと瞬きをした。

「お仕置きだったのでは？」

「そうだった」

キョトンとしながら尋ねると、苦笑しながらハロルドが「あー……」と天を仰ぐ。

どうやら彼の機嫌は、もうすっかり直っているらしい。

圧倒的支配者になりきれない、甘さ。無意識にフローラに合わせてくれる、優しさ。

滲み出るその愛情が、ずっと暗闇の中にいたフローラを救っていることに、彼は気づいているだろうか。

「貴方になら、なにをされてもいいの」

嫉妬と独占欲を解放するための言葉を、真っ直ぐにぶつける。

ハロルドは「参った」と言って、フローラの拘束を外してくれた。

そのまま、ぎゅっと抱きしめられる。

解放された両手を彼の背中にまわして応えようと、フローラを強く求める瞳が、行為の続きを訴えていた。

「お仕置きの時間をはじめようか」

どう考えても、もう『お仕置き』ではなくなっているのだけれど、嫉妬させないでくれという訴えは、まだ残っているらしい。

意地悪そうな表情を作って、名目だけでも続けようとするハロルドに、笑いながら頷く。

「はい」

「笑っていられるのも、今のうちだ」

「っん……あ、んう、っ」

全てを奪い取るような口づけとともに、限界を迎えていた熱が押し入ってきた。

独占欲と、惜しめない愛情が、フローラに注がれる。

役立たずと罵られ、虐げられ、愛情を知らずに怯えるばかりの日々を生きてきた。

そんな凍りついていたフローラの心を、ハロルドこそが優しく溶かしてくれる。

温まるフローラの気持ちに反応するように、部屋に飾られたお気に入りの白い花が、ぽわっと柔らかに光っていた。

第一章 人質としての興入れ

(……これが、雪?)

窓の外に降りはじめた真っ白な結晶を捉えて、フローラは感嘆の溜め息を漏らした。たった一人で馬車に揺られる旅路も、もうすぐ終わる。

隣国、イザイア王国。その国境付近に差しかったところで、外の景色が変わった。

知識としてしか知らなかった雪というものに感動するとともに、もう後戻りできないという恐怖が、それ以上に押し寄せてくる。

扉の隙間からひんやりした空気が入ってきて、その冷たさがさらに不安を煽った。

感動を分かち合う友人も、恐怖を慰め合う仲間も、揺れ動く感情をただ見守ってくれる侍従も、フローラにはいない。

馬車がゆっくりと減速し、馬の小さな嘶きを合図に、やがて完全に停止する。

どうやら国境に到着したらしい。

「お待ちしておりました」

知らない男性の声がして、ビクリと身体が震えた。

(今さら、逃げ出すことなんてできない)

大きく深呼吸し、フローラは覚悟を決めて立ち上がる。

サクリフ王国の第三王女であるフローラは、数日前、たった一人で王城を出た。

蛮族の国と呼ばれる隣国、イザイア王国を統べる王のもとへ、人質として嫁ぐために――

事のはじまりは、数日前の昼下がり。

「喜びなさい。なに一つ取り柄のないお前が、ようやく国の役に立てる時が来ましたよ」

サクリフ王国、第三王女フローラ。

王女という立場にありながら、フローラの居場所は王宮のどこにもなかった。

唯一落ち着けるのは、後宮の片隅にある小さな裏庭。

派手な装飾の施された城内や、大輪の花が咲き誇る庭園とは違う、とても寂しい場所だ。

だが、控えめな花々が健気に咲くこの場所が、フローラは大好きだった。

使用人のような格好しか許されず、日がな一日花の世話をしているフローラを見咎めては、「はじめじめしたところがお前にはお似合いね」と馬鹿にしていた、血の繋がらない母。

その継母が、普段は近寄りもしないこの場所に突如現れ、嬉々として声を上げた。

(ああ、とうとう追い出される日が来たのね)

フローラはそう覚悟すると同時に、ようやく解放されると、どこかほっとしてもいた。

サクリフ王国は、遙か昔に一人の偉大なる魔法使いによって建国された国だ。

世界には複数の国が存在するが、中でも特に歴史が古く、大陸でも無類の力を誇る大国として長く君臨してきた。

その最も大きな特徴は、魔法だ。サクリフ王国は古くから、強力で便利な魔法を用いて力をつけ、財を築いてきた魔法国家である。

だが、過ぎた力は身を滅ぼす。

便利な魔法の力に頼り切つて苦勞することを忘れ、富と財を食い潰してきたサクリフ王家は、いつしか取り返しがつかないほどに腐り切っていた。他国とは歩んできた歴史が違う、という考えと慢心が、じわじわと王国に住む人々の目を腐らせたのだ。

だから周辺諸国が大きく力をつけてきていることにも、気づけなかった。

いつまでも他国に対して高圧的な態度を取り続け、魔法に依存することのない発展を蔑ろにしてきたこの国は、じわじわと衰退の一途を辿っていた。

確かに建国当時は、人々の先導役として憧れの目を向けられる国だったのだろう。

だがそれも今は鳴りを潜め、権力を振りかざすだけの厄介者だと裏では評され、嫌われている。

その事実を、一体どれくらい国民が正しく受け止められているだろうか。

「まともに魔法も使えないなんて、王族の恥晒しが！」

「申し訳ございません」

ピシリと音を立てて、継母の振り下ろした鞭がフローラの手の甲を打つ。

フローラは、痛みと恐怖に身を縮ませて、謝ることしかできない。

その様子を、継母の子にして王太子である異母弟ナルが一步引いた場所から、ニヤニヤと笑いながら見つめていた。

血の繋がった家族がともに過ごす時間とはとても思えない、異様な光景。

こんな日々が、フローラの幼い頃から幾度も繰り返されてきた。

サクリフ王国においては、魔法の力だけが正義だ。

魔法が不得意であつたり使えなかつたりする者は、もはや人として扱う価値なしとして見られる。

王家の人間ともなれば、なおさらだ。

それなのにサクリフ王国第三王女であるフローラには、王家の人間として期待されるほどの魔法の力が、備わっていなかった。

魔法は、努力でどうにかできるものではない。生まれ持った資質なのだ。

どんな魔法が使えるかも、魔力の多寡も、全ては生まれた瞬間に決まっている。ある程度能力を伸ばすことはできても、使える魔法は変わらない。魔力の最大量が増えることもない。

それがわかっていても、フローラは少しでも王家の人間にふさわしくあろうと努力を惜しまなかったし、継母もそれを強要した。

「まったく、『植物を元気にする』などと、なんの役にも立たない魔法しか使えない娘が王家にいるなんて、みっともないいったら」

「申し訳……」

「謝れば済むと思っているのかしら？ さすが売女の娘は浅はかね」

継母はフローラをなじる時、亡くなった母親を引き合いに出す。それが一番フローラを的確に傷つけられると知っているのに加え、母親本人に直接文句が言えない苛立ちも混じっているのだろう。取り合っては駄目だとわかっているのに、どうしても黙っていられなくて、顔を上げる。

「お母さんは、関係な……」

「口答えるつもり？」

「い、いえ」

再び鞭が振るわれる気配を感じて、反射的に身がすくむ。同時に小さな否定の言葉が口から漏れて、なにもできない自分への苛立ちだけが募っていった。

「もういいわ、下がちなさい」

なにも言えなくなったフローラに大きな溜め息を吐きかけて、継母はしつしつと犬でも追い払うかのような仕草をする。

涙がこぼれるのをぐっと我慢しながら深々と頭を下げ、フローラは自室へ戻るべく、とぼとぼと歩き出した。

「お前の泣き顔、たまらないよ」

フローラの進む先にはいつもナルが陣取っていて、横を通り過ぎる時に必ず声をかけてくる。ねっとりとした視線を避けるように駆け出すと、ナルの愉快そうな笑い声がいつまでも背中にこ

びりつく。

これが、フローラの逃れられない日常だった。

「……はあ」

後宮の片隅。王宮から隔離されるように建てられた古びた塔に、フローラの部屋はある。その塔からほど近くの、誰も寄りつかない裏庭。

安息の地に辿りつき、ようやく緊張感から解き放たれた。

ふわふわと風に乗って花弁を揺らす花々はフローラを心配してくれているようで、癒やされる。

しゃがみ込んで優しく草花に触れ、大きく息を吸う。花たちが咲き誇るこの辺りは特別に空気が澄んでいる気がして、それだけで力が湧き出るような気さえた。

フローラは両手に力を集め、祈りを捧げる。

（元気に咲いてね）

母の墓地を兼ねたこの場所で、派手ではないけれど遅くたぐまく咲く小さな花々の世話をしている時だけが、フローラの心安らげる時間だ。

魔法大国であるサクリフ王国の王女という立場にはあるけれど、フローラが使える唯一の魔法は『植物を元気にする』という、ささやかなもの。

強力な炎を操る魔法を得意とする継母や、その力を引き継いだナルに馬鹿にされるのは当然だ。フローラが持つ力。それはフローラの実の母親に由来するものなのだろう。

王宮の厨房^{ちやうぼう}に出入りしていた、野菜売りの娘。それがフロラの母だった。

現サクリフ王が、フロラの継母である王妃と結婚して間もない頃。なにを思ったか当時の王は、「真実の愛を見つけた」と言つて、ただの町娘だった母を、後宮に上げたのだ。

誰もが「なぜこのタイミングで……」と、思つたことだろう。

王と母、身分差がありすぎる二人の間には、それを凌駕^{りやうが}するほどの愛があつたのかもしれない。実際、王は娶^{めと}ったばかりの王妃に目もくれず、後宮で心細く暮らしている母のもとへ足繁く通つたという。

そして母は、まもなくフロラを腹に宿した。

だが母は貴族社会に縁のない町娘で、その上、魔法を使うこともできない。

魔法至上主義のサクリフ王国においては、底辺の存在。

優しい性格の母が生きていくには、後宮という憎悪渦巻く環境は、あまりにも厳しすぎた。

フロラを産んで数年後。心労が祟^{たた}つたのか、母は静かに息を引き取つた。

今でこそフロラは第三王女とされているが、本来の生まれ順で言うると第一王女である。

母が生きている間、王の寵愛^{ちやうあい}は母にしか向かなかつたからだ。

母の死後、王が母の面影を求めて娶つた側妃との間に二人の姫が生まれた。フロラが第三王女とされたのは、出自によってその順位が繰り下げられたからに過ぎない。

王妃との間に男児が生まれたのは、側妃たちの子が次々と誕生した、さらにその後のことだった。これで義務は果たしたと言わんばかりに、王が王妃に産ませた子はナル一人きりである。

王と王妃の関係が冷え切っていることは、城内だけでなく城外でも周知の事実だ。

嫁いできたばかりの王妃を放つて町娘に入れあげた挙げ句、その死後も彼女に似た娘ばかりを側妃に迎える王。

王妃という立場だけを与えられた継母の心情は、如何ばかりか。

継母にとつて唯一の幸運は、王の寵愛がフロラには向かなかつたことだろう。

「意地汚い泥棒猫の娘が！ここに置いてもらえるだけでも、ありがたく思いなさい」

「偉大なる魔法国家であるサクリフ王家に、ろくに魔法も使えない卑しい娘が名を連ねるなんて」

「母親と一緒に死んでしまえばよかったのに」

残されたフロラに対してまるで憂^{うれ}さ晴らしをするように、継母の『躰^{しつせ}』と称した虐待は続いた。側妃や子らがそれに続くのは、当然である。

そんな生活から逃げ出したくとも、フロラを助けてくれる者は誰一人おらず、行くあてもない。ただ、ずっと厳しくあたられてきたフロラでさえ、継母の気持ちを押し量るのはたやすかつた。憎々しげな継母の表情は、いつもフロラの先にいる母へ向けられていたから。

フロラにとって最も不幸だったのは、魔法の力に関して、父ではなく、平民である母の血を色濃く継いでしまったことだ。

強大な魔法を操る力が備わっていれば、母の亡き後も王家の人間として受け入れてもらえたかもしれない。母の面影を宿すフロラならば、王に目をかけられて穏やかに生きていける可能性は、大いにあつただろう。

けれどフローラに与えられた力は継母のように力強い炎を操る力でも、人々を癒やす聖なる力でもなかった。ただ、『植物を元気にする』という地味なもの。

（野菜を育て売っていた、お母さんのような生き方だったら、重宝したに違いないけれど……）
ここは王宮。野菜を育てられるような畑もなければ種もない。そんなものが必要とされることすらない場所だ。

王族として生まれたフローラには、全く役に立たない能力である。
役立たずと罵られるのに、十分な理由だった。

高い能力を持つ王子や王女が生まれるたび、ますますフローラの居場所はなくなっていく。
もともと、母娘ともども後宮では疎まれてきたのだ。

王宮に仕える優秀な使用人たちは皆、なにかしら強力な魔法を使える。
そんな使用人たちにとっても、ろくに魔法を使えないフローラは嘲笑^{ちやうしょう}的だった。

（誰に認められなくても、私にはこの場所があるもの）
優しくった母の思い出とともに遺品を埋めて、自分だけの墓地と決めたのは、フローラにあてがわれた古い塔の入り口近く。

人が寄りつかず、荒れ果てた寂しい場所だ。

それでもめげずに毎日祈りを捧げ続けたところ、植物たちはフローラの魔法に、少しずつ応えてくれた。

今では古塔の周辺一帯に、花々が咲き乱れている。

名前すらなく、雑に扱われながらも、ひっそりと生える小さな草花。

王女とは名ばかりで、ボロボロの格好で這^はいつくばっている、居場所のないフローラ。

誰に愛されることもなく、それでも健気に咲き続ける名もなき花々が、自分の境遇と重なるように思えた。

力強く咲き誇る小さな花々から、フローラはたくさんの勇気をもらっている。

「良い香り……」

花々を傷めないように気をつけつつ、お気に入りの白い花の絨毯^{じゅうたん}の中へ、ぽすんと寝転ぶ。
ふわりと優しい香りに包まれ、フローラはほっと息をついた。

専属の侍女もつけてもらえず、まるで存在しない人間であるかのように扱われる。

そんな状態だから、フローラは自ら食事や水を求めて、厨房や井戸に足を運ばなければならない。
最低限とはいえ、食事が与えられるだけでも、眠る場所があるだけでも、幸運なことだ。

（わかってはいるけれど……）

そうは言っても、唯一の居場所である古塔や裏庭から一步出れば、そこは敵だらけである。

ただ後宮内を歩いているだけで、継母や側妃、弟妹たちのおもちゃ同然だった。

抵抗できないフローラは、都合のいい苛めの標的。

今日のように継母に見つかれば、躰と称した鞭が容赦なく飛んでくる。

ようやく訪れた心穏やかな時間に身を委ねようとした、その瞬間。

ガサリと、草を踏み荒らす音が耳に響いた。

「こんな陰気くさいところにいたのか」

「……ナル様、どうしてここに……？」

予想外の人物の登場に驚き、フローラは慌てて起き上がった。

「王族にふさわしい魔法のなんたるかを、僕が直々に教えてやろうかと思つてさ」

呆然とするフローラをよそに、ナルはズカズカと花々を踏み荒らしながら近づいてくる。

フローラの大事にしている花々は生命力が強く、軽く踏まれるくらいではびくともしないどころか、より頑丈に成長する。それがわかつているからこそ、フローラはいつも小さな白い花たちの中に身を委ねられるのだ。

けれどナルは、土ごと抉り取るようにぐりぐりと花を踏み潰しながら、歩みを進めていた。

いくら強い種類の植物でも、これでは根がやられてしまう。

「お願い、踏まないで！」

「お前だつて、花の上で暢気に寝ていたじゃないか」

慌てて訴えるフローラを、意地悪そうな表情が真つ直ぐ見つめている。

ナルはフローラを傷つけるために、わざと花を踏み荒らしているのだ。

言葉に詰まるフローラの様子を嬉しそうに眺めつつ、ナルが目の前まで近づいてくる。

そして無遠慮にフローラの腕を引っ張り、無理矢理立ち上げさせた。

「痛っ……」

「さあ、『ナル様、どうか私に魔法を教えてください』と、懇願してみせろ」

普段は継母の後ろでニヤニヤと見ているだけのナルだが、フローラと二人きりになると、途端に加虐性を露わにする。

嫌な予感がしたフローラはふるふると首を横に振つて拒否の意を表しながら、後ずさろうとした。だがナルは、フローラの腕を強く掴んだまま離そうとしない。それどころか逃げようとしたのを察知して、ぐいっとフローラの身体を引き寄せる。

「離してください！」

腰にまわされた手の感触が気持ち悪くて、フローラは必死にもがいた。けれど抵抗むなしく、ナルに後ろから抱きしめられるかたちになってしまう。

「言え」

ぎゅっと両手を握りしめて耐えるフローラに、ナルが耳元で鋭く命じる。

ぞわりと嫌悪感が背中を走り抜けた。

こうなったナルは自分の思い通りにならない限り、フローラを解放しない。溢れそうになる涙をこらえながら、フローラはうつむいた。

「……ナル様、どうか私に、魔法を教えてください」

「いいだろう！ よく見ていろよ？ 魔法っていうのは、こうやって使うんだ」

フローラが逃げられないように腰を抱いたまま、ナルは空いている手に魔力を集中させる。

他人を見下し、馬鹿にするのが当たり前だと思っているナルの人格は、とても尊敬できるものではない。

けれど魔法大国サクリフの長たる国王と、身分のみならず魔力の高さを見込まれて嫁いできた王妃の子であるナルが、優れた魔法の力を持つことは確かだ。

継母と同じ、炎のような赤い髪。それと同じ色の火球が、みるみると手のひらの上にできあがっていく。

ナルがチラリとフローラの表情を覗き見た。

——嫌な予感がする。

「や、やめて！」

フローラは声を張り上げたが、時すでに遅し。

ナルの放った炎が、咲きはじめたばかりの小さな花々を無残に焼き尽くしていく。

「魔法っていうのは、支配の力だ。他者に、ましてや植物なんかに力を分け与えるお前の能力は、魔法と名乗ることすらおこがましい。お前は無駄な努力なんてせずに、ただ僕にかしずいていればいいんだよ」

「そんな……」

「なんの役にも立たない雑草を間引いてやったんだ。感謝してほしいね」

たとえナルの狙いを読めていたとしても、フローラに彼を止めることはできなかっただろう。

（けれど、それでも……）

大切な花々が燃えていく様子を、ただ見ていることしかできない自分が情けなかった。

ボロボロと涙を流すフローラを満足そうに眺めていたナルは、辺り一面が跡形もなく燃え尽きた

のを見届けてから、ようやくフローラを解放した。

「あ、あ……っ」

崩れ落ちるフローラの姿に満足したらしく、ナルは楽しそうな笑い声を立てながら去っていく。

残ったのは焼け野原となった裏庭と、役立たずのフローラ一人。

（本当に、私を苦しめるただけに來たのね……）

母の墓からは少し離れた場所にいたのは、不幸中の幸いだった。

もし、母との思い出ごと焼き尽くされてしまったらと思うと、ぞっとする。

「ごめんね。ごめん、なさい」

黒焦げになってしまった白い花の残骸を抱きしめ、謝罪の言葉を繰り返す。そんなことしかできない自分に、また涙がこぼれた。

魔法とは、支配の力だとナルは言う。それは彼独自の考えではなく、サクリフ王家の、ひいては王国の魔法使いたちの総意と言っても過言ではないだろう。

この世界に存在する生命の力、自然の力、そういったものを借り受けて、魔法というものは効果を表すとされる。

彼らの魔法は、自然を振（ふ）り伏せるようにして力を奪い、都合よく消費するものだ。そこに敬意はなく、ただ一方通行の篡奪（さんだつ）しか存在しない。

だがフローラにとって魔法とは、もっと違うものだと感じていた。

芳しい花の香りや力強く芽吹く新緑に元氣をもらい、雨が大地に降り注ぐように、受け取った元

気をまた草花へ、土へと返していく。

そうして巡り、支え合う力こそが、フローラの感じている魔法だった。

自然を従え、支配しようとするサクリフ王家と、自然を慈しむフローラとは、根本的に考えが異なる。野菜売りの娘であつた母が疲弊していったのは、身分や魔法のことももちろんだろうけれど、一番はそんな価値観の違いに耐えかねたからではないだろうか。

フローラの抱く、自然を、花々を慈しむ心を育てたのは、母の教えだったから。

「王家の恥」

「役立たず」

「生きている価値もない」

何度も繰り返しそう言われ、馬鹿にされ続けても。

フローラ自身は、大好きな花々の力になれるこの魔法が好きだった。

心を込めて祈れば花々はいつも応えてくれたし、傷ついた心を優しく満たしてくれる。

（守れなかった）

大切な仲間を。寄り添ってくれる友人を。

フローラの魔法は、『植物を元気にする』だけ。

どんなに懸命に祈っても、尽きてしまった命は取り戻せない。

手が真っ黒になるのも厭わず抱きしめた灰の中から、小さな種がこぼれ落ちた。

（これは……）

理不尽に踏みつけられても、必死で生きようとする、命の証。

その力強さに勇気づけられ、フローラは見つけ出した種をぎゅっと握りしめた。

「どうか……どうか、元気になつて」

フローラにできることは、とても少ない。役立たずであることは自分が一番わかっている。

裏庭を作り直したとしても、また理不尽に全てを奪われるかもしれない。

それでも、フローラに寄り添ってくれた花々を、どうしても助けたかった。

（いつか、心を壊されるかもしれない）

恐怖と悲しみに囚われたフローラの表情を、ナルは好む。

フローラの泣き顔を見るためなら、彼はどんな残酷なことでもするだろう。

自らに歪んだ執着を向ける異母弟のことを考えるだけで、身体が拒否感を示して震えた。

（泣いては駄目）

どんなにつらくても、涙を流しては相手の思うつぼだ。

（もう二度と、踏みにじられませんが）

いつか再び、あの白く小さな花々が咲く時が来る。

握りしめていた種を、丁寧な土へ返しながら、フローラは祈りを込めるのだった。

「……縁談？ 私に、ですか？」

裏庭を訪れた継母が口にしたのは、隣国の王との婚約話だった。

「そうです。お相手は、隣国イザイアの国王ハロルド。学のないお前でも、噂くらは聞いたことがあるでしょう」

「イザイア王国……」

最低限の教育しか受けさせてもらえていないフローラでも、建国間もない隣国の噂は知っていた。曰く、乱暴で毛むくじやらの、獣のような王が治める蛮族の国。

国民たちも皆、凶暴で野蛮。枯れ果てた不毛の大地を這いながら、人が人を喰らって生きる弱肉強食の国。魔物が闊歩し、力なき者は奴隷のような生活を強いられるという……

声のトーンが落ちたフローラを満足そうに眺め、継母はまるで祝いの言葉を述べるかのように声を張り上げる。

「我が国の姫を妻にと、ハロルド王たつての希望です」

「国王の？」

「格下の国ではありませんが、最近力をつけてきているという噂もありますし、手を結んでおくに越したことはありません。進めてよろしいですね？」

継母は格下だと嘲っているが、昨今のイザイア王国の勢いはとどまるところを知らず、いずれサクリフ王国にまで攻め入ってくるのではないかと噂も、ちらほら聞いている。

たとえフローラ相手だとしても、王族同士の婚姻話が持ち上がるくらいだ。おそらくそれは、ただの噂にとどまらないのだろう。

攻め込まれなくては、王女をよこせ——と。言わば人質だ。

サクリフ王国にとつても、王女を与えることで伝統ある大国が新興国を国として認めたという建前が発生する。恩を売って友好関係を作れるというわけだ。

継母の言葉は問いかけのかたちではあるものの、フローラには肯定の選択肢しか用意されていなかった。

役立たずの第三王女は野蛮な強国への人質にもってこい、かつ厄介払いができて好都合なのだろう。継母の歡喜の表情は、フローラへの皮肉だけではないのだとよくわかる。

（耐える場所が、変わるだけよ）

このままサクリフ王国の後宮で虐げられながら生きるのと、隣国イザイア王国で奴隷のように生きるのに、なんの差があるだろう。

それにフローラが拒んだところで、もう決定事項であることは明らかだ。

「はい」

頷くしかないフローラを前に、継母はまるで積年の恨みを晴らしたかのように、艶やかに笑ったのだった。

そうしてフローラは、サクリフ王国とイザイア王国の国境に辿りついた。
大国の権威を示すような、豪華な馬車。

その中にフローラは、一人きりだった。護衛の騎士も侍女も、ついてきていない。

（私の侍従になりたい者なんているはずがないのだから、仕方がないわ）

馬車を操っていた御者も、日銭で雇われた平民である。

イザイア王国から来た迎えも、こちらほどではないにしろ少人数に見える。

質素な馬車が一台と御者の他には、馬に乗った護衛の騎士が数人だけ。だがこちらはフローラへの嫌がらせというよりは、単純に人手不足の可能性が高い。

急速に力をつけてきているとはいえ、イザイア王国はまだ建国から年浅く、発展途上の国。大国からの嫁入りならば侍従の人員も多いと考えて、サクリフ王国の護衛や侍女をあてにしていたとしてもおかしくはない。

（迎えに来てくださっただけでも、ありがたいわ）

そうでなければ、フローラは雪の降るこの地にたった一人、置き去りにされるしかなかった。

フローラは表向き、サクリフ王国から友好の証として嫁いできた花嫁だが、実際は単なる人質に過ぎない。イザイア王国が手厚くもてなす必要はないのだ。

仮にも王家の血を引く王女が、誰の手も借りることなく、一人で馬車から降りようとしている。

フローラの姿を見て慌てて駆け寄ってきた一人の騎士が、そつと手を差し伸べてくれた。

「ありがとうございます」

その手は戦う男らしくゴツゴツしていて、自分とは全く違う感触。けれどフローラにはそれが恐ろしさよりも、温かく優しいものに感じられた。

「ようこそ、イザイアへ」

「お世話になります」

城を出る前に「お前はなにをされても従順に大人しく頭を下げていればいい」と叩き込まれた淑女の礼をとって、顔を上げる。

そこには金髪碧眼の見目麗しい男性が、にこりと微笑んでいた。

背はフローラよりも頭一つ分高く、鎧に身を包み、毛皮のマントを身につけている。

背に大剣を佩くその姿は、まさしく戦う者であることを示していた。

美しい彼の風貌を見ると、とても凶暴で野蛮な民族には思えない。

あれよあれよという間に迎えの馬車に乗せられて、旅路は続く。

乗り込んでみると、イザイア王国が用意してくれた馬車はきらびやかさはないものの丈夫で、圧倒的に揺れが小さかった。

外観の質素さとは違って車内は明るい。

それに、たくさんのクッションが用意されていた。旅慣れていないフローラへの心遣いなのだと、目でわかる。

正直なところ、外側を取り繕っただけの自国の馬車よりも、ずっと乗り心地がいい。

エスコートしてくれた見目麗しい騎士が、なぜかフローラとともに車内へ乗り込んできた。

「失礼」

寒くないようにという配慮だろうか。厚手のストールをフローラの膝にかけてくれる。

至れり尽くせりだ。

体験したことのない状況に戸惑っていると、隣に座った騎士が身につけていた毛皮のマントを外し、そっとフローラの肩に羽織らせた。

「あ、あの……」

「その格好では寒かっただろう。イザイアの冬は雪深い。温かくしておかないと風邪を引く」
サクリフ王国は、冬でも滅多に雪は降らない。フローラが所有している数少ないドレスの中から今日の衣装を選んだつもりではあったけれど、気候の差までは考えていなかった。

実際には、上に羽織るものを持っていなかったというのが正しいのだけれど、それでも持ちうる限りで最上級の格好だったのである。

だが国境の地ですら雪が降っているほど気候に差があるのなら、イザイアの人間の目から見ても着すぎると思われても仕方がないだろう。

国内ではあまり見慣れない毛皮のマントには、騎士の温もりが微かに残っている。それは柔らかく、暖かくて、冷えた身体にはありがたかった。

イザイア王国からは頻繁にとはいかないまでも、年に数度は使者が訪れる。そんな彼らの姿を見ては、「毛皮を身につけるなど蛮族の象徴だ」と王宮の者たちはよく陰口を叩いていた。

だが、実際にその地に身を置いてみると、寒さの厳しいこの地で生きていくための知恵であることがよくわかる。

「ありがとうございます」

「まだ冷たいな」

どうやら、緊張と寒さで冷えたフローラの指先が気になっているらしい。

見目麗しい騎士が、フローラの指先を両手で包み込んで温めるように「はあ」と息を吐く。壊れ物を扱うように優しく扱われて、フローラはどうしていいかわからずドギマギした。

こんなに至近距離で、見知らぬ男性と触れ合ったことなどない。

フローラのそばにいたのは大好きだった母だけで、父親であるサクリフ王とさえ、謁見時以外には会話をしたこともなかった。その母も幼い頃にいなくなってしまったので、男女問わず、人との触れ合いには全く慣れていない。

（こんなに大切に扱われたら、勘違いしてしまいそうになる）

彼はただ、国王のもとへ連れていく前に病気にでもなられたら困ると思っただけなのだろう。

道中を預かる者として、名目上でも国王の妃になる立場のフローラを、ぞんざいに扱うことができないだけ。

そのフローラがどれだけ常識のない格好をしている。待ち合わせの場所にたった一人で現れても。内心では「小娘が、面倒をかけやがって」などと思って我慢しながら世話をしてくれているのだとしても。曲がりなりにも大国の王女であるフローラを前に、冷淡な態度は取れないのだ。

「申し訳ございません。私の知識が浅く……」

「貴国とは気候が全く違うのだ、貴女が謝る必要はない。むしろ、こちらから衣装を贈っておくべきだった。配慮が足りず、申し訳ない」

「そんな」

謝罪した上で「必要以上に気を遣う必要はない」と続けるつもりだったのが、逆に謝られて恐縮する。

結婚相手であるハロルド王とフローラは、顔を合わせたことがない。

突然決まった、政略結婚の相手なのである。

手紙や品物を贈り合うような親しさは一切ないし、そうする時間もなかった。

なにせ、継母から人質同然の結婚を言い渡されてから出発まで、三日もなかったのだから。

それに、花嫁が自国の衣装をまといて嫁ぐのは普通のこと。

確かに王家間の結婚ともなれば、本来ならば何度も打ち合わせを重ね、満を持しての花嫁行列となるのが、通常ではある。

普通は日時だけでなく、衣装などの細かいすり合わせもするものなのだろう。

けれど、王族として認められていないも同然のフローラに、そんな権利はなかった。

たとえイザイア王国のほうになにか申し出てくれたとしても、継母がすげなく断ってしまったに違いない。きつと「厄介者が格下の国に嫁ぐのに、花嫁行列なんてもつてのほか」と、鼻で笑われて終わるに決まっていた。

（乗り心地のいい馬車に、ストールやクッションまでご用意ださって……十分すぎるのに）

その上、自らの防寒具であるマントを貸し、嫁ぎ先の気候を把握できていなかったフローラの知識不足を咎めることもなく、謝罪までしてくれた。

これ以上、なにを求めることがあるだろう。

ふるふると首を横に振るフローラに苦笑しながら、騎士はずっと手を握っていてくれた。

馬車が速度を下げながら、イザイア王国の城下町に入る。

人のざわめきが大きくなり、窓の外へ視線を移すと、そこはすっかり雪景色に変わっていた。

人々の行き交う道路こそ綺麗に除雪されているが、綿飴わたあめのようにふわふわとした、思わず触ってみたくなる真っ白な雪が、こんもりとたくさんの屋根を彩っていた。

「綺麗……」

思わず感嘆の言葉が漏れる。

「皆、貴女を歓迎している」

くすりと笑う気配とともに、騎士がそう声をかけた。

「歓迎？」

言葉の意味がわからず首をかしげたけれど、窓の外の風景を見て、すぐに理解した。

人々が馬車に向かって、笑顔で手を振ってくれている。

「おめでとうございます！」

「ようこそおいでくださいました」

やけに人通りが多いとは思ったが、単に町が賑にぎわっているだけではないらしい。

馬車に乗っているのがハロルド王の花嫁だと皆知っている様子で、友好的な声がフローラまで

届く。

「どうか手を振って、応えてやってほしい」

「私などが、そんな大それたことをしてもいいのでしょうか」

「もちろん。彼らは貴女を一目見ようと、こうして集まったのだから。ほら！」

自分が歓迎されるなど、とてもではないが考えられない。けれど人々の輝く瞳は、確かに馬車の中にいるフローラに注がれている。

促されるまま小さく手を上げると、次々と歓声が上がった。

驚いて固まっているフローラをよそに、騎士も人々の声に応えるように手を振り上げる。

するとなぜか、歓迎の声がますます大きくなった。

（騎士様は、人気者なのね）

想像とは違いすぎる状況に混乱するけれど、人々の笑顔に嘘はない。

フローラは馬車が王城へ入るまで、ひたすら手を振り続けた。

「ここが……」

城門を越えると、ほどなくして馬車が停まり、城内へ続く扉が開く。

颯爽と先に馬車を降りた騎士が、またしても当然のように手を差し出してくれた。

恐縮しながらも素直に手を借りて馬車を降りると、そこにはエスコートしてくれた騎士と同じように、毛皮のマントと鎧に身を包んだ男性たちが、ずらりと並んでいた。

どうやらこの姿は、イザイア王国に仕える騎士の正装らしい。

フローラが地面に足をつけたのを合図に、騎士たちが一斉に剣を高々と空へ掲げる。

故郷の国にはないその力強さは、イザイア王国の高い武力を示しているのだろう。

けれど、そこに恐怖は感じない。

統率の取れた行動に、『蛮族の国』という形容はとても当てはまらなかったし、それが敬意と歓迎を示すものだと、わかったからだ。

「お手をどうぞ」

騎士は、このまま最後までエスコートしてくれるつもりらしい。

驚いて固まっているフローラに、騎士が腕を差し出してきた。

断ることもできずに、そつと手を添えて歩みを進める。

長いような短いような、不思議な感覚に包まれて辿りついた先は、王城への入り口。

そこには、王の臣下と使用人たちと思われる幾人かが並び立ち、フローラを待ち受けていた。

身なりの整った人々を前に、緊張が走る。

（さすがにここに、ハロルド王はいないだろうけれど）

蛮族の国だと聞いていたのに、どこを見ても、全くそうは思えない。

大した魔法も使えず、王女としての教養もなく、マナーも知識も付け焼き刃でしかないフローラよりもずっと、この国の人々は洗練されている。

「お帰りなさいませ」

「俺が不在の間、問題は？」

「ごいません」

「準備は？」

「できております」

縮こまってしまったフローラの横で交わされる会話に、ふと違和感を覚えた。

先頭で出迎えてくれたのは、王の臣下であらう年若い男性。

その男性が放った言葉は、人質を連れてきた一介の騎士に対してはあまりにも丁寧すぎる。

(これではまるで、この騎士様が城の主かのような……)

ふと視線を隣に移動させると、フローラをここまでずっとエスコートしてくれた騎士が気づいて、ふわりと柔らかな笑顔を返してくれた。

あまりにも優しいその表情に、自然と顔が赤くなってしまう。

ぼんやりと彼を見つめていたら、いつの間にか腕に添えていた手を取られ、正面で向かい合うかたちになっていた。

「イザイアへようこそ、我が花嫁殿」

「え？」

「歓迎の宴の用意ができています。さあ、中へ」

「待っ……」

フローラが疑問を口にする暇もなく、あっという間に城内へ導かれた。すれ違う人々が、笑顔でフローラに挨拶をする。

皆がフローラを歓迎してくれているようにさえ思えた。

サクリフ王国での扱われ方とは、雲泥の差。

(望まれてここにいるのではないかと、錯覚してしまいそう)

正直、城内を案内されていた間の記憶はない。

我に返った時には、フローラは大きなホールの壇上に立たされていた。

ホール内では立食式の豪華な食事が色とりどりにテーブルを飾っている。

目前からは、先ほど出迎えてくれた臣下や使用人、騎士たちの好意的な視線が、フローラに向けていた。

蛮族の国などという認識は、改めなければならない。

フローラの隣に立つのは、国境まで迎えに来てくれた、金髪碧眼の見目麗しい騎士。

すぐ後ろには豪華な椅子が二脚置かれていて、ホール全体を見渡せる。

もうここまで来れば、確認しなくてもわかる。

ここは、玉座だ。

つまり、フローラを国境まで迎えに来てくれた、この騎士こそが――

(ハロルド王なの？ この優しく、若くて、綺麗な方が？)

歓声を上げる臣下たちに手を上げて応える隣人は、どう考えても王でしかありえない。

城下の人々が馬車に手を振っていたのも、王に対してのものだったと思えば納得がいく。

誰が見ても「格好いい」と形容するだろう彼は、『毛むくじやらの蛮族の王』という噂からはか

け離れすぎていて、理解が全く追いつかない。

「……貴方がハロルド様、なのですか？」

「ああ、そうか。申し訳ない、確かに自己紹介をしていなかった！俺は、ハロルド・デ・イザイア。今はこの国で、王をやらせてもらってる。これからよろしく頼むよ、フローラ姫」

「は、はい」

「貴国とは、なにもかもが違うだろう。困ったことがあったらなんでも言ってくれ。花嫁の望みは、できる限り叶えたい」

フローラの持つ『国王』のイメージとは全く違う、砕けた口調と気安さが緊張をほぐす。

（自分を戒めておかないと、言葉通りの意味だと信じてしまいそう）

どれだけ王が明るく、優しい人であっても、フローラは花嫁とは名ばかりの人質に過ぎないのだ。故郷のサクリフ王家から見放されているフローラでは、唯一与えられた人質という役目さえ、十分に果たせるかどうか怪しいが。

（この身は、ハロルド様に捧げられるべきもの）

再度自分の立場を言い聞かせて、フローラは淑女の礼をとる。

「過分なお言葉、痛み入ります」

「さあ、座って」

フローラの心境を知ってか知らずか、ハロルドはまるでフローラを本当に王妃として迎えるかのように、玉座への着席を勧めてくれた。

（私は、ここに座る資格はないのに）

戸惑うフローラの肩を軽く押して、ハロルドが問答無用で座らせる。

フローラがすぐ言う通りにしなかったから、気を悪くしたかもしれない。

（怒られる）

反射的に、身体がビクリとこわばる。

だがいつまで経っても、鞭や怒号は飛んでこなかった。

恐る恐る見上げた先には柔らかに笑うハロルドの顔があつて、ここはサクリフ王国とは違うのだと、ほつとする。

（人質として差し出された国で、安心するなんて……）

この国の人々にとってフローラは、建国間もない新興国に嫁いできた、大国の王女。体裁として、最初だけは歓迎の意を示してくれているに違いない。

わかっていても、役立たずのフローラに対して丁寧に接しようと努力してくれるその気持ち、嬉しかった。

（私にできることは少ないけれど……ハロルド様のお役に立ちたい）

人知れず決意を固めるフローラだが、着席して数分も経たないうちに、ハロルドが落ち着きなくそわそわとしはじめた。

「堅苦しいのは、もう終わりでいいだろう？」

「少しくらい耐えられないんですか」

玉座のそばに立っていたのは、城の入り口で出迎えてくれた臣下だ。

王としては年若いハロルドよりも、さらに年下のように見える。

だが王に苦言を呈する姿からすると、イザイア王国の重臣なのだろうか。

呆れた表情の臣下に窘められつつも「もう無理だ」と玉座から立ち上がったハロルドが、颯爽とホールに交じっていく。

チラリと臣下へ視線を向ける。

すると、じろりと突き刺すような鋭い視線が返ってきて、フローラは思わず目を逸らした。

（歓迎されていないのは、わかっていたことなのに）

サクリフ王国で常に向けられていた、あの蔑むような冷たい視線とは違う。それでも、彼の視線が好意的なものでないことは明らかだった。

（本来は、これが正しい反応なのよ）

ぎゅっと両手を握りしめて、うつむく。

イザイア王国に来てから皆が優しくしてくれるから、油断してしまっていた。

深い溜め息が聞こえてきたけれど、フローラに顔を上げる勇気はない。

「フローラ姫！」

重たい空気を打ち破ったのは、ハロルドの明るい声だった。

弾かれたように視線を前に向けると、ホールで人々に囲まれたハロルドが、使用人や騎士たちと談笑しながら、フローラに手を振っていた。

やがてハロルドは皆からあれもこれもと次々と渡される大皿を両手いっぱいには持てるだけ抱え、フローラのもとに戻ってくる。

サクリフ王家では考えられない、臣下たちとの距離感。

まるで王とは思えない、気安い行動。

呆気にとられているうちに、フローラにはとても食べきれそうにないほど山盛りの食事が、ズイッと差し出される。

「あ、あの」

「さあ、遠慮せずに食べてくれ」

「こんなに……？」

その王らしからぬ姿に驚きつつも、ハロルドから差し出された皿を思わず受け取った。

勢いに吞まれて、くすりと笑みがこぼれる。

そんなフローラを見たハロルドが、あまりに嬉しそうに笑うから、ドキリと胸が高鳴り、また緊張する羽目になってしまうのだけれど。

なぜかそれを、嫌だとは思わなかった。

第二章 すれ違う日々

フローラがイザイア王国に来てから、数週間。

奴隷として働かされることも、慰み者として陵辱りやうじやくされることもなく、フローラは平穏極まりない日々を過ごしていた。

堅牢堅固けんろうけんこなイザイアの城。その最上階に位置するフローラの部屋は、紛うことなく王妃のものだ。快適に整えられた部屋と、これまで身につけたことのないようなドレスの数々に、きらびやかな宝飾品。広い部屋には、退屈しないようにと用意された本やボードゲームの他、世の高貴な女性たちが好むという刺繍道具しゅうどうなどもある。

サクリフ王国の後宮の片隅で、名もなき小さな花々を慰めに日々を生きるしかなかったフローラには、未知のものばかりだ。

それでもそれが、他国から嫁いできた姫のために用意された品々だということはわかった。

役立たずだと虐げられ続けてきたフローラには不釣り合いな、なにもかもがそろえられた空間。

「なにか足りない物があれば、すぐに用意する」

「いえ、十分すぎるくらいです」

案内された一言目がそれで、ただただ恐縮するしかない。

「そうか？ もし不自由があつたら、遠慮なく言ってくれ」

「は、はい」

不思議そうなハロルドに対して、身に余る扱いにフローラは頷くだけで精一杯だ。

フローラが緊張しているのだと判断したのか、ハロルドはそれ以上追及しなかった。

その日以降、フローラがなにかを要求されるようなことは、今のところ一切ない。

イザイア王国が不毛の大地と称されるのを示すかのように、食事のバリエーションは乏しいけれど、肉を中心に十分な量が、一日三食しっかり用意されている。

一日一食、死なない程度に与えられていたサクリフ王国での食事に比べれば、天と地の差だ。

むしろ、サクリフ王国よりずっと居心地がよかった。

これでは人質や奴隷どころか、貴賓扱いではないか。

（このままでは、本当に自分の立場を忘れてしまいそう）

名ばかりの妻であっても、夜の慰みくらいは役に立たないと。そうフローラは覚悟を決めている。けれどイザイア王国に到着した日も、なにもなく終わった。

ベッドに導かれはしたものの、優しく頭を撫でられ額に軽くキスされるばかりで、同衾どうきんどころか「おやすみ」と、ただただ甘やかされただけ。

緊張のピークだったせいだろうか。初めて体験するふわふわのベッドの柔らかさに抗えず、ハロルドにあやされながら一人でぐっすり眠ってしまい、翌朝、慌てて飛び起きる羽目になった。

（人質どころか、妻としての役目さえ果たせないなんて……）

フローラは後悔と自己嫌悪に陥ったけれど、まともに話す機会もなく、国内に強力な魔物が出現したとの報告を受け、ハロルド自ら討伐に向かってしまった。

挽回の機会は未だ訪れていない。フローラは見知らぬ土地に、一人ぼつんと残されていた。

「大変申し訳ございません」

「ハロルド様が、国民のみなさまのためにお心を砕くのは当然です。お気になさらないで」

王城の人々は、フローラに会うたび頭を下げてくれる。

王として、ハロルドが決めた優先順位は、間違っていない。国内の安全と名ばかりの妻との交流では、どちらが重要か考えるまでもないだろう。フローラに謝る必要はないのだ。

むしろ王城の皆が、いつまで経っても大国から嫁いできた尊い王女として接してくれているのが、気になっていた。

（後から態度を変えられるくらいなら、最初から人質として扱ってくれたほうがずっと楽なのに）最初から最下層の扱いならば、気にもならない。

けれど、一度上げられてから落とされると、案外こたえるものだ。

（それがハロルド様の作戦なら、もう効果は十分だわ）

フローラの考えとは裏腹に、ハロルドと会えない日が積み重なるにつれて、城内の者たちの申し訳なさそうな表情は、深さを増していく。

謝罪されるたびに、「気にしていません」と告げるのは、間違いなくフローラの本心だ。むしろ優しく接してくれて、ありがたいとさえ思っている。

やがて、正直にそう言葉を紡ぐことこそが、使用人たちに気を遣わせているのだと気がついた。よくよく話を聞いてみると、どうやらハロルドは「フローラに、寂しい思いをさせないように」と、使用人たちに厳命しているらしい。

（私のことなんて、「死なない程度に適当に扱え」とでも、お命じになればいいのに……）

国内が大変な状況にもかかわらず、ハロルドはフローラの心境にまで気を配ってくれていたのだ。それに気づいてからは、「大丈夫」という言葉を意識的に吞み込むようになった。

「もしお時間があるのでしたら、イザイア王国やハロルド様について、聞かせてください」

フローラはなにも知らず、なにも知らされず、噂だけを信じてイザイア王国に来てしまった。だからこの国について、きちんと知りたいと思った。勝手な思い込みで判断するのは失礼だ。

「もちろんです！」

「なにかからお話ししましょうか？」

「やっぱり、ハロルド様の英雄譚がいんじゃないか？」

「いや、まずはイザイアで快適に過ごす方法から……」

イザイア王国について、特にハロルドについて、フローラが尋ねるようになると、城内の皆は一樣に、「よくぞ聞いてくれました！」と言わんばかりに饒舌^{じやうせつ}になった。

大国の王女という肩書きを持つフローラへの対応をはかりかねていたからなのか。それとも、口数の少ないフローラに皆が合わせてくれていたのか。

黙々と仕事をこなす人が多いという印象だったのだけれど、どうやら違ったらしい。

（お喋りを我慢させてしまっていたのなら、申し訳なかったわ）

イザイア王国が自由な国風だということは、初日から感じていた。

それに加えて、身分の上下とは違う仲間意識のようなものが、根強くあるように思う。

ハロルドのことも、王というよりまるで兄弟や親戚の子供、あるいは仲の良い友人のように捉えている節がある。

歓迎の宴でも、ハロルドは使用人や騎士たちと距離が近いように感じたけれど、どうやらお互い様であつたらしい。

（素敵な関係だわ）

薄暗い場所に追いやられ、人に会えばゴミを見るような冷たい視線を浴びせられる日々。

そんな中で生きてきたフローラには、イザイア王国が暖かな陽だまりのように感じられた。

イザイア王国が一年中厳しい気候で、大半が不毛の大地であるというのは事実だ。魔物が多く出現し、死と隣り合わせの環境でもある。

けれど決して、蛮族の国ではない。人を奴隷のように扱ったり、虐げたりなんてしない。皆が協力し合い、尊敬し合つて、厳しい環境でも手を取り合いながら生き抜いている。

イザイア王国に住まう人々の強さや優しさは、他人を見下すことに慣れきっているサクリフ王国の民とは、比べものにならなかった。

王であるハロルドが自ら魔物討伐に出ているのも、その一端だ。

「魔物が出るたびに、ハロルド様の力を頼つて、城に出陣要請がかかるのですよ」

イザイア王国で随一の強さを誇る戦士がハロルドであり、王が先頭に立つて戦うのが、一番犠牲が少なく効率的ということらしい。

魔物に困つたら遠慮なく王城へ報告するように、と国民たちには周知されているそうだ。

「まあ」

兵たちの士気を高めるためではなく、王自身が戦うなんて、想像もしていなかった。

けれど確かに、あの優しいようなハロルドが民に犠牲を強いて自分だけ安全な場所にいることを、よしとするとは思えない。

フローラの手を握ってくれた手も、現役の騎士らしい逞しさだった。

「お忙しくても、ハロルド様は必ず応えてくださる。だからこそ、皆も力を発揮できるのです」

「留守番も頼りにされてるって思えるけど、やっぱりハロルド様の隣で戦いてえよな」

「こういう血の気が多いヤツも多いですから、ハロルド様にはうまく手綱を引いてもらわないと」

「なんだと！ そういうお前だつてこの間……」

「け、喧嘩（けんか）はおやめください」

「大丈夫。いつものことですから、放っておきましょう」

騎士たちが言い合いをはじめたのを見て焦るフローラの肩にそつと手を置き、侍女たちが「やれやれ」という顔をする。

こうやって、誰もが遠慮なく言葉を交わせる関係を築き上げているからこそ、イザイア王国のまとう空気は温かいのだろう。

(でも……いくら強いといっても、王という立場の人が、率先して戦いに出るなんて)

ハロルドが国民から支持されるのは、強いこと以上に、自ら先頭に立って道を切り開き、人々を守り導くことのできる存在だから。

会って間もない、ほとんど会話する時間さえ持てていないフローラにさえ、ハロルドが慕われている理由がわかる。

「今回は遠征ではありませんし、執務もありますから、ハロルド様も何日かに一度は帰城してらっしゃるんですねえ」

「夜中に帰城して朝方出立することも多く、フローラ様とお時間がなかなか取れなくて、大変申し訳なく……」

「それは本当に！ お氣になさらず！」

また謝罪がはじまりそうになり、慌てて止める。

強めの口調になってしまったけれど、皆気にした様子もなく「お優しい」と感激していた。

今現在フローラは、とても健康的な毎日を送っている。

氣候が合わないだとか、食べ物が違うだとか、そんな理由で身体の調子を崩す暇さえないくらいに、大切してもらっていた。

(サクリフ王国での不遇な環境と比べたら、快適すぎて困るくらい)

就寝時間すら毎日しっかり決まっていて、寝不足にもなりようがない。

時間が合わないのは、フローラが起きている時間にハロルドが忙しく動き続けているからだ。

怪我をして帰ってくることも少なくならしく、夜遅くまで働きづめ。

(そんな生活が続けているのなら、疲労も溜まってらっしゃるに違いないわ)

それなのにハロルドは、すやすやと憂いなく眠るフローラを、起こすことさえしない。

それどころか、「不自由はないか」とか「元氣に過ごしているか」と短い手紙まで残していく。

(無理矢理起こしてくださっても、構わないのに)

フローラが一人ぼちなのは、サクリフ王国にいた頃と同じ。

なのにここでは、寂しさも息苦しさも感じなかった。

手紙の文言が毎回違うと気づいたのは、いつ頃だっただろうか。フローラを氣遣う言葉が増えるたびに、ハロルドに対して抱いていた負の感情が、一つずつ減っていく。

(お優しいのは、間違いなくハロルド様のほうよ)

奴隷のように扱われるとばかり思っていた。虐げられ、苦しむ場所が変わるだけだと思っていた。自分のほうがよっぽど大変なはずのハロルドに、氣にかけてもらえるなんて。

(全く想像もしていなかったわ)

だからこそ、なんの役にも立っていない自分の存在が、心苦しくてたまらない。

やがて、当初抱いていた恐怖や警戒心が消え失せてしまうくらいに手紙が積み重なった頃。

フローラの心には、ハロルドへの心配ばかりが募るようになっていた。

「失礼いたします」

珍しく、城内がざわついている。人の出入りが少ない最上階の部屋にいるフローラにでもわかるくらい、その日はいつもと様子が違っていた。

ハロルドがくれた手紙の束に手を添えて、無事を祈るのが最近の日課となっているフローラの耳に、コンコンと小さく扉をノックする音と、入室許可を願う出る声が届く。

このひと月ほどで聞き慣れたその声は、フローラの侍女となったエミリアのものだ。

サクリフ王国からたった一人で嫁いできたフローラには、身のまわりの世話を任せられる人物がいなかった。

旅立つことが決まったその時から、フローラに誰かを頼る考えはなかった。これまでも放置され続けていたのだから、身のまわりのことは一人でできる。嫁いだ後もそう変わらない生活になるだろうと信じ込んでいたので、侍女や護衛の必要性を感じていなかったのだ。

フローラに供がないという事実に慌てたのは、イザイア王国のほうだった。

そこで、この国に迎えられた翌朝、紹介された侍女がエミリア。ハロルドが信頼のおける腹心として、直々に任命したのだという。

それからというもの、エミリアはいつもフローラのそばに仕えてくれている。

「どうぞ」

手紙の束から視線を外して応えると、すぐにガチャリと扉が開いた。

侍女姿ではなく、腰に剣を佩いたエミリアが、颯爽と入室してくる。

エミリアは、騎士でもあるのだ。侍女として仕えてくれているが、身のまわりのことを自分で

きてしまうフローラにとって、エミリアは護衛という意味合いのほうが強い。

エミリアも侍女の仕事には慣れていないのか、食事や着替えなどフローラが行ったほうが要領のいいことが多々あった。

そのせいもあるって、エミリアとは主人と侍女というより、気安く話せる護衛兼友人のような関係を築きはじめている。

友人ができるなど、大それた夢だとフローラは思う。

ただエミリアが、フローラにとって頼りになる姉のような存在であることは、間違いない。

(いつ見ても、惚れ惚れするほど格好いい)

すらりと伸びた長身に、堂々とした立ち居振る舞い。加えて女性らしい曲線を持ち合わせたエミリアは、とても魅力的だ。かと思えばドレスや宝飾品の扱いは不得手なのか、フローラの着替えの手伝いに四苦八苦する様子は可愛らしい。

世の男性は皆、きつとエミリアのような綺麗で格好よくて、そしてどこか可愛らしいところがある女性を、好きになるのだろう。

「なにかあったのですか？」

「ハロルドが、もうじき帰ってくるそうですよ！」

明るい声と、ハロルドの無事を告げる言葉に、フローラの心は弾む。

同時に、王を遠慮なく「ハロルド」と呼ぶエミリアの姿を見て、チクリと小さく胸が痛んだ。

どれだけハロルドが優しくとも、これは政略結婚なのだ。

あくまで両国間の友好の証として嫁がされただけ。そこに愛などない。

ハロルドは見た目も性格も素敵な、頼もしい男性だ。

後宮の片隅に追いやられ、ボロボロの姿で暮らしていた、誰からも愛されないフローラとは違う。若くしてイザリア王国を建国し、民たちを導き、今まさに脂の乗った二十代半ばのハロルドに、良い相手がいないほうがおかしい。

（ハロルド様とエミリアは、まさにお似合いの二人だわ）

ハロルドの隣に立つのは、なんの役にも立たないフローラより、美しく可愛らしく、一緒に戦うことのできるエミリアのほうが、どう考えてもふさわしい。

彼女はハロルドを呼び捨てにしても許される関係なのだ。親密でないはずがない。

エミリアという相手がいながら、国のためにフローラを迎えることになったのだとしたら——優しい二人は、フローラに真実を告げないかもしれない。

けれど、この想像があなたが間違っていないことは、色恋に疎いフローラにだってわかる。

「売女」「泥棒猫」「人のものを奪う淫女」……継母がフローラの母を引き合いにして罵る時の言葉が、いくつも頭をよぎった。

だが継母にとってフローラの母は、後から出てきて夫を奪った憎い女だったのだろう。

今のフローラも、同じではないか。

それどころか身分を笠^{かさ}に着て逆らえない立場にある分、なお性質が悪い。

ひやりと、背中に冷たい汗が流れる。

真実を確かめたい気持ちをぐっと呑み込んで、フローラは無理矢理に微笑んだ。

「ハロルド様は、ご無事なのです。ね。本当によかった」

「まだ全部が解決したわけではありませんが、討伐も最終段階です。近々フローラ様に、会いに来られるかもしれませんよ！」

エミリアは嬉しそうに報告してくれたが、ハロルドが忙しいのは相変わらずらしい。

厳しい状況なのであれば、義務感でフローラに会いに来るよりも、エミリアと話していたほうが、心は安らぐのではないだろうか。

もしかしたら、いつもフローラを起こさずに手紙だけを残していくのも、空いた時間でエミリアと逢瀬^{おうせ}を重ねているからかもしれない……などという悪い想像が、頭を占めていく。

（ハロルド様の優しさまで疑うなんて）

自分の心の卑しさが、嫌になる。

ハロルドにふさわしいのは自分ではない、という確信は深まっていくばかりだ。

「……ええ、そうですね」

まるで自分のことのように喜んでくれるエミリアに対して、曖昧^{あいまい}に頷く。

ハロルドに恋人がいようと、人質同然の立場で文句など言えない。

（役立たずのくせに、愛されたいなんて……なんて罪深い）

小さな棘^{とげ}がずっと刺さったまま、もやもやとした感覚は晴れるどころか、霧がかかっていく。

幸せそうなハロルドとエミリアの姿を想像しては落ち込みそうになりながらも、フローラは置か

れた立場を再度自分に言い聞かせるしかなかった。

それから数日後の、真夜中のことだった。

珍しく配慮のないガチャンという音が突然聞こえて、フローラは目を覚ました。

城の最上階には、王と王妃の部屋しかない。

(ハロルド様ご不在の今、このフロアには私しかないはず)

昼間はエミリアと一緒にいてくれることが多く、扉の前にも護衛として騎士が立っている。

ただ夜間になると、階段下に騎士が二名配置されるのみで、最上階は全体的に静寂に包まれているのが常だった。

四六時中侵入者を警戒しなくても最低限の警備で足りるのは、城内で命を狙われるような危険がなく、イザイア王国が平和である証拠。

もちろん、城や城下町の外は魔物の脅威で溢れているし、今もハロルドは皆を守るために戦っているのだが、逆に言えば魔物以外の、人間同士の醜い争いとは無縁の国である、ということだ。

後宮の片隅にある古塔から、ほとんど出ることが許されていなかったフローラでさえ、サクリフ王城に陰謀や謀略がはびこっているのを知っていた。

それを警戒する必要がないイザイア王国は、大国という立場に胡坐をかいて表面だけ取り繕い、実情は荒れ放題のサクリフ王国よりずっと立派な国であるように思える。

無遠慮で無機質な音は、大きく響いた。

誰かが、この部屋に足を踏み入れたのだ。

就寝の時間帯、城内の皆が部屋を訪れることはまずない。

たとえ緊急の用事であつたとしても、必ず声をかけてくれるだろう。

(となると、外部からの侵入者?)

だが、最低限とはいえ階下では複数の騎士が警備を行っている。

誰にも気づかれることなくこの最上階に侵入するのは至難の業だ。

「どなた、ですか……?」

フローラはぎゅっと布団を握りしめながら身を起こし、勇気を振り絞って問いかける。

名目上、サクリフ王国の王女としてここにいるフローラの身になにかあつた場合、国際問題に発展するおそれがある。「嫁がせた王女を危険に晒した」と、イザイア王国を責める大義名分をサクリフ王国に与えてしまうことになるからだ。そうなれば、急激に成長しているイザイア王国の力を、ここぞとばかりに削ぎにくるに違いない。

サクリフ王国の手の者が、危険を冒してまでフローラを狙いに来るとは思えないが、警戒を怠る言い訳にはならない。

ただでさえフローラは、ここにいるだけでハロルドの幸せを奪っているのだ。

役立つことができずとも、足枷にだけは絶対になるまいと心に決めていた。

(いざとなったら、なにか証拠を残せるように抵抗しなくては)

たとえフローラが殺されたとしても、それがイザイア王国のせいではないと証明できるだけの証

拠が残せたなら、ハロルドの責任は追及されずに済む。

フローラに使えるのは、攻撃魔法でも、相手を怯ませる魔法でもなく、『植物を元気にする』魔法。どんなに必死になっても、その力で侵入者と対峙するのは難しい。

(抵抗するにしても、魔法以外の手段を取るしかないわ)

キョロキョロと辺りを見まわし、武器になりそうなものを探す。

そうしている間にも、フローラのもとに足音が近づいてくる。

暗闇に慣れてきたフローラの目が、相手を捉えた。

(……………え?)

フローラのいるベッドに大腿で近づいてくるのは、イザイア王国に来たあの日から一度も会えていなかった——ハロルドその人だった。

確かに、最上階の住人であるハロルドであれば、警備の騎士たちが止める必要はない。

たとえハロルドが、フローラの部屋に向かったとしても、誰も口出しはしないだろう。

疲れた王が癒やしを求めて王妃の部屋を訪れたところで、なにもおかしいことなどないのだから。

ハロルドは扉からベッドに一直線に向かってくる間にマントを外し、シャツをはだけさせつつブーツを脱ぎ、身につけているものを無造作に床に転がしていく。

最後に大剣をテーブル近くに立てかけて、ベッドの隣まで迫りついたハロルドは、かろうじてズボンだけを身につけた姿となっていた。

そして、そのまま。

「はああああ……」

大きな溜め息とともに、ベッドに倒れ込んだ。

ハロルドの下敷きにされているフローラのことなど、全く見えていない様子だ。

「ハ、ハロルド様？」

「ん？」

そのまま目を閉じようとするハロルドに、必死で呼びかける。

ようやくベッドに異物があることに気づいたのか、ハロルドがぼんやりと目を開けた。

しばらく焦点が定まっていらない瞳でフローラを見て、ハロルドがふにやりと笑う。

見たことのない幼げな笑みに、キュンと胸が高鳴ったけれど、今はそれどころではない。

(ちゃんと目を覚ましていただかないと！)

このまま再び目を閉じられたら、フローラは下敷きにされたままだ。

圧死することはないだろうけれど、朝まで耐えられる自信はない。

「起きて、起きてください！」

もぞもぞと身体を動かして、なんとかハロルドの体重を逃がしつつ訴える。

そんなフローラの頬を、ハロルドが両手で包んだ。突然触れたことに驚いて動きを止めると、ハロルドがじつとフローラの顔を見つめていた。

「夢、か……?」

ぼつりと呟いたハロルドが、突然フローラの唇を塞ぐ。